緋弾のアリア
synesthesia

吉良飛鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

共感覚を持つイ・ウーのメンバー、エマノンは、教授からアリアの護衛任務を頼まれる。
果たして彼は教授の見せた色の意味が分かるのか？
教授の願いは届くのか？

目次

一発目　Prologue ―― 1
二発目　ALIA ―― 3
三発目　after this ―― 8

一発目　Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

東京武偵校人工浮島空き地島にて

「呼んだか？」

「うん。少し君に頼みたいことがあってね」

１５～６歳の小柄な銀髪の少年とイギリス紳士の様な人が対峙する

「頼みたいこと？」

小柄な少年が聞くと紳士が一枚の写真を出す。そこにはピンク色のツインテールの女の子が写っていた。

「名は？」

「神崎・Ｈ・アリア」

「殺しの任務か？」

「護衛任務だよ。君の講座に報酬を月毎に５０万円振り込む。但し、彼女にバレないようにね」

「了解」

「エマノン、今の私は何色に見えるかい？」

「水色だ。悲しくとも楽しげでそれでいて嬉しそうな色だ」
「そうか…エマノン、忠告だが、憎しみに憎しみで戦うな。君は、私たちとは違うのだから…」
「わかっている。用はそれだけか？教授（プロフェシオン）」
「あぁ、そうだよ。護衛の件頼んだよ」
「了解」
　エマノンが去り教授はこう呟いた
「君は分かってないよエマノン…せめて、あの子と会って変わってくれればいいのだが…」

二発目　ＡＬＩＡ

共感覚って知ってるか？人間は、五感が独立して動いているが、共感覚者の場合五感が連動して動く。物を見たときに味がしたりとか音を聞くと形になって見えるとか、文字に色があったりとかする。幼少期の頃に〇〇ちゃんは何色とかって無かっただろうか？それのようなことが俺ことエマノンにある。それだけだ。

さて俺は護衛対象の通う東京武偵高の編入するためにハッキング…もとい手続きをしようとしていたが、すでに済んでいるらしく寮も用意されているため、そこに向かった。ちなみに護衛対象こと神崎・Ｈ・アリアと同じ強襲科だった。

寮に入ったエマノンはベレッタＰｘ４を整備して何をするわけでもなく眠りについた。

朝になり、防弾制服を身に纏うと、女子寮へとチャリを漕いでいった。実は、女子寮の方が男子寮に比べて緑が多いことで有名だ。ちらほら男子生徒も見える。が、エマノンにはもう一つ目的があった。ここの周辺ならアリアと出会える可能性が高いからだ。

そこで、細い路地にはいり、適当に迷子になったのを装いながら接触しようとしたのだが……

「そのチャリには爆弾が仕掛けてありやがります」

と、機械的な合成音が聞こえる

ふむふむ…え？

と後ろを振り向くとセグウェイにＵＺＩが括り付けられていたのが尾行していた。

全ての五感を総動員させ、自転車の爆弾を探すと、サドルの下にプラスチック爆弾があった。しかも、紐で簡単に括り付けられているだけでナイフで切ることが出来そうなのでポッケからナイフを取り出し爆弾を引き剥がし、人気のいない場所へ向かう。エマノンはＵＺＩごと爆弾の爆発処理を行おうとした。が、ＵＺＩに爆弾が狙撃された。爆発の時脅威となるのが、爆熱よりも爆風である。エマノンは自転車から投げ出され、地面に受身をとった。ＵＺＩを探し、見るとＵＺＩも爆風に晒され横転していた。

エマノンは、無力化したと見なし、一応教務課に報告し、この場を去った。

しばらくすると、近くで爆発音が聞こえ、駆け寄っていくと小柄な女の子が男子高校生に被さっていた。…跳び箱の上から二段目のところで…なんでこうなっているのだろう？と聞きたいのは俺だ。

一応二人を起こしてみるが反応が無い。ただの屍のようだ。とやっていると、先ほど

のセグウェイの音がしたため、素早く二人を跳び箱の中に押し込み、自身もその中に入り込む。そしてベレッタＰｘ４を取り出し、臨戦体制になる。
「な、何!?何がどうなってんの!?」と女の子が叫ぶ
取り敢えず黙れと言い、落ち着かせる。写真の子に似ているため、なんとなくこいつがアリアだろうと思うが、確証がない。その為、エマノンは、相手を警戒されないためという意味も込めて自己紹介することにした。
「俺は、エマノン。名字は無い」
「私は、神崎・Ｈ・アリア。それで、今の現状は?」
「(やっぱりか)お前らが跳び箱の中で気絶していて、近くにセグウェイの音がしたため、先ほどのＵＺＩだと思って跳び箱の中で臨戦態勢だ」
そこに、ズガガガガガガといくつもの発砲音が聞こえ、ＵＺＩが来た推測する。
「来たか」
と言うと、エマノンはＰｘ４をアリアはガバメントを二丁で構えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

激しい銃撃音で俺は目が覚めた。
目の前では、小柄な銀髪の少年と、ピンクのツインテールの小柄な少女が銃を手に

戦っていた。
そして、視線を下にずらすと、スカートが短いせいでトランプ柄のパンツが見えてしまっている。
ヤバい、あのモードなっちまうと考えていると、弾が切れたのか、マガジンを投げ捨て、予備のマガジンと取り替える。
にしても、女の子ってこんなにも良い匂いがするのかよと考えているとなってしまっていた。あのモード、ヒステリアモードに…
＊＊＊＊＊＊＊＊
「駆逐、完了」
と、エマノンが言うと、
「まだよ、一時的に出て行っただけ。リロードしたらまた来るわ」
「このまま逃げるか？」
「ここで逃げきれる保証は無いわ。もしかしたら影に潜んでいるかもしれない」
「じゃあ、どうすればいい？」
「こうすればいいさ」
と、いつの間にか起きていた男子高校生がアリアをお姫様抱っこしてマットへ座らせた。

「起きていたのか？」
「今さっき目覚めたさ」
「そうか、俺はエマノン。お前は？」
「遠山キンジ」
　そう名乗るとキンジは一人で体育倉庫から出て行く
「ハチの巣にされるわよ!!」とアリアが叫ぶも、キンジはスルーし、外に出た瞬間、ありえないことをやってのけた。ひらりとＵＺＩの弾を躱すと同時に居合のように銃を抜き、ＵＺＩの銃口に弾が吸い込まれるように入って行った。
　何者だよこいつ…
　これが、エマノンの抱くキンジに対する第一印象だった
　そしてキンジは颯爽と歩いて行った

三発目　ａｆｔｅｒ　ｔｈｉｓ

あの事件の後、アリアと共に登校し、教室へ向かった。
そして、転入生の紹介ということで黒板の前に立つと開口一番アリアはこう言った
「先生、私アイツとコイツの間がいい」
と、俺とキンジに指差して言った
当然俺らの反応は…
「「はぁ!?」」
となるわけで、先生も生徒もあっさり了承してしまった…それでいいのか武偵高…いや、いいんだろうな。深くは考えまい
そんな中、フリフリをつけた金髪ロリ巨乳…峰理子が席を立ちながら
「理子わかった！わかちゃった!!謎の転校生がキーくんともう一人の間の席を強要、これはつまり三人は熱烈恋愛中なのだ!!」
と言った。理子は、表ではアホな行動ばっかりだが、情報収拾能力は秀でており、イ・ウーでは、彼女の教えてくれた情報でかなり助けられた。
…よし、ちょっとだけ悪ノリしよう

「今日は、朝っぱらから（銃撃戦）が激しかったしな。アリアが止めても聞く耳持たずで（ＵＺＩのいる表に）一人でイク（行く）し、終いには（銃口の）中に発射するしな」
…しばらくの静寂のうち、
「「「キンジィ（遠山ぁ）!!!」」」
うん、今日も平和だな
と理子を見るといたずらが成功したような顔になってた
アリアはアリアで顔を真っ赤にして口をパクパクさせていた

夕方になり、寮に入ったら、
「何このカオス…」
いや、だって寮に入ったら銃撃戦してたり、料理作ってる奴がいるんだぞ…しょうがなく料理を作ってるイケメン（名前は確か不知火）に話を聞くとテレビのチャンネル権を巡って争っていたらしい
…もうアタマ痛い。そういえばキンジは1人部屋だということを思いだし、しばらくあそこに居候を決め、さっさと荷物をまとめ出て行った。
そして、ピンポンとチャイムを鳴らすが反応は無い。ただの居留守のようだ。とドアノブに手を伸ばすと鍵が開いていた

「失礼します!!」と元気にドアを開けるが
シャワーを浴びている音が聞こえた。なんだシャワー浴びていたのかと思いリビングへ直行する。
しばらくすると、キンジとアリアが言い争っている声が聞こえたので行ってみるとタオルを身につけたアリアと伸びてるキンジがいた。
いや、ホントこれからどうすればいいんだろう？